

ただ一つの泉

第2編 16章

キリストの従順、死、復活、そして昇天について(使徒信条解説)



使徒信条は私たちの救いが全的に、またそのすべての部分がひとつひとつみなキリストの内に含まれていると告白しているのです(使徒 4:12)。ですから最も小さな部分でもこの他の場所に救いを求めてはいけません。キリストの内にだけ様々な善きものが豊かに準備されているのです。それをキリストというただ一つの泉から飲むことができるのだと言っているのです。

砂漠のオアシスをご存じですか。砂漠のオアシスこそ「命の泉」と言えます。この章の題名「ただ一つの泉」はそのような意味でつけられました。キリストはなぜ私たちにとってただ一つの泉と言えるのでしょうか?そして彼はどのようにしてその泉となられたのでしょうか?その泉で私たちはどのような水を飲み、どのような恵みにあずかることができるのでしょうか?これから私たちはその真理について学びます。

第1節 神の愛がキリストを通して私たちに贖われた。

私たちは死の砂漠に見捨てられていたような悲惨な人生を送っていました。私たちが罪によって見捨てられた死の砂漠には神の呪いと怒りが満ちています。毒蛇とさそりがそこら中を歩き回り、焼けた砂と呪いの風、そして焼け付くような喉の渇きが襲いかかります。「あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、無知、不誠実、無情、無慈悲」などの砂粒のように限りない罪悪が満ちているのです(参照、ローマ 1:18-32)。

そこには救いの希望が全くなく、ただサタンと死の僕となって、永遠の死の刑罰を受けるだけの悲惨な運命が待っているのです。そのように凄惨な状態にある私たちの前に神は命の泉をわき出させてくださったのです。その泉の水を飲む者はみな死のもたらす毒から解放さ

れて、すべての罪の病を癒され、神の怒りに対するおそれと永遠の死の恐怖から解放されて、神の敵から神の子に生まれ変わらせていただけるのです。それは神秘の泉です。

キリストはただ一つしかない救いの泉です。ですからすべての人間は義と自由と命と救いをただキリストにだけ求めなければなりません（使徒 4:12）。イエスと言う名前も単に無意味に与えられてものではありません（ルカ 1:28-33）。彼がご自分の民をその罪から救う者であることを示すために天使が天から与えられた名前です（マタイ 1:21）。次のベルナルドゥスの言葉は意味あるものとして覚えておくべきです。

「イエスという御名は、単なる光であるだけでなく、また食物である。またこれは油でさえあって、これなしでは、たましいのすべての食物はひからびてしまう。またこれは塩でさえある。これによって味付けられるではければ、われわれの前におかれるもの（教理）はみな味気ないものである。要するに、これは口の蜜、耳の歌、心の喜び、そして同時に医薬である。そして、すべて論議されることは、もし、それに、この御名が鳴り響かないならば、愚劣なものである。」

そしてこの泉が神の愛を導き出したのではなく、神の愛が砂漠にその泉をわき出させたのです（ローマ 5:8;ヨハネ 4:19）。神が私たち罪人をご覧になられるとき、そこには憎しみしかありません。しかし、神はまた私たちのうちに愛することができるものを見つけ出そうとされました。私たちは墮落していますが、神が創造された大切な被造物です。そして神はキリストにあって私たちをご覧になられ、救いの計画を立てられたのです（エフェソ 1:4,5;ヨハネ 3:16;ローマ 5:10）。キリストの内にある私たちを神がご覧になられるときにそれは常に清く、義で愛すべきものとなるからです。

第2節 使徒信条解説：キリストの従順、死、葬り

どのようにしてキリストは私たちのためにその泉となられたのでしょうか？一言で答えるならばそれは従順によってです。彼は従順によって私たちを贖われ、泉となられました（ローマ 5:19）。キリストは生涯のすべてにおいて従順を貫かれました（マタイ 3:15；ガラテヤ 4:4,5）。キリストが歩まれた救いの道は死の道であり、その道は従順の道でした（マタイ 20:28；ヨハネ 1:29；ローマ 3:24,25；コリント二 5:21；フィリピ 2:7,8）。彼には罪だけはありませんでしたが、私たちと全く同じ弱さを持っておられました。それで父の御心に服従するため自分の弱さと凄絶な戦いを行わなければならなかったのです。

まずキリストはローマ帝国が任命したユダヤ総督の前での裁判を通して有罪とされました。そのようにして私たちを待っていた天の裁きを代わりに受けてくださり、私たちが受けるべき罰をご自身で負われたことを示してくださったのです。また彼の死は私たちを解放する贖いの死となったために私たちに代わって罪人の資格で死なねばならなかったのです（マルコ 15:28；イザヤ 53:12）。

しかし、彼を裁いたピラトは重ねて彼の無罪を主張しました（マタイ 27:23；ヨハネ 18:38；詩編 69:4）。そのように罪のない神の御子に私たちの罪が転嫁されたために私たちの罪責から完全に解放されたのです（イザヤ 53:12）。十字架は私たちが受けるべき罪の呪いがキリストに移されたことを示しているのです（ガラテヤ 3:13,14；申命 21:23）。罪の呪いがキリストの身体を覆われたときに父は罪の力を打ち破られたのです。

キリストはご自分から贖いの供え物になられ、罪の呪いを負わされて荒野に放たれる贖罪の雄山羊（レビ 16:8,10,26）や律法に定められた犠牲の献げ物として象徴される生け贄の原型となられたのです（イザヤ 53:10）。キリストは罪の呪いに圧倒され飲み込まれてしまったのではなく、むしろ呪いを積極的に引き受けられ、その力を完全に打ち砕いてくださったのです（コロサイ 2:14,15；ヘブライ 9:14）。そこで私たちはキリストが裁かれたことで無罪釈放され、彼が呪いを受けられたことで祝福を受けることができるように信仰によってそうされたのです。キリストが私たちのために流された血は私たちの罪の価を取り除いただけではなく、私たちの腐敗を清めるものとなったのです（エフェソ 5:26；テトス 3:5；黙示 1:5）。

キリストがご自分を死に引き渡されたことは私たちのように死に屈服させられたものではなく、むしろ死を飲み込まれたものなのです（ペトロ 3:22；ウルガダ訳「死を飲み込む」）。つまり私たちを死から救われるために、死を味わう必要があったのです（ヘブライ 2:9,14,15）。彼の死と葬りから私たちが受ける第一の益は死の恐怖から勝利することができるようにされたことです。第二の益は私たちの肉の欲を殺して、それを墓に葬り、二度と古い人の性質が繁栄したり、悪い実を結ぶことができないようにされたのです（ローマ 6:4,5；ガラテヤ 2:19、6:14；コロサイ 3:3）。

第3節 使徒信条解説：陰府に降り

教父たちの中にはキリストの陰府降りについて語っていない人は一人もいません。この箇所についてのそれぞれの解釈が違うだけです。誰が使徒信条にこの条文を付け加えたかということが重要なわけではありません（礼拝で使われている韓国語の使徒信条にはこのキリストの陰府降りがない）。信徒信条の条文には一つも必要でないものはなく、すべて純粋な神のみ言葉から導き出されています。ある者たちは陰府を墓と言う言葉を言い換えた表現であると主張します。しかし、このように簡潔に整理されている使徒信条には無駄が無く、違った表現で墓という言葉が繰り返す理由は全くないのです。

またある人々はその陰府は律法の下に生きて、死んだ人々の魂が繋がれている場所で、彼らのもとに降って行ってキリストはご自分の成就された贖いの救いを宣布され、そこから彼らを解放させたのだと語ります（アキナス、詩 107:16；ゼカリヤ 9:11）。いろいろな人がこれを事実であると熱心に擁護しますが（セルベトス）そのような主張は聖書と何の関係もない幼稚なおとぎ話にすぎません。

キリストが陰府に降って行かれたと言う言葉には二つの意味があります。第一に、彼がすでに死の経験者と不信者すべての靈魂にキリストの死とその贖いの救いの恵みを聖霊の力によって悟らせるようにされたという意味です（ペトロ第一 3:19）。第二に、彼が直接に陰府の力と永遠の死に対する恐怖心に向き合って戦われたという意味です。彼はただ肉体において死んだだけではなく、悪魔の力と地獄と死の恐怖と戦って勝利されたということです。

ペトロも強調しているように、神の御子はただ死なただけではなく、死の苦しみに支配されたと言っています（使徒 2:24）。キリストはいたずらに死なれたのではなく、死を非常に恐れながらも、しかもそれを避けようとはなさらなかったのです。主は十字架を前にして、死を避けることができるようにと祈られたのではなく、死の恐れに飲み込まれてしまうことのないようにと祈られたのです（マタイ 26:39；ヘブライ 5:7）。彼は神に見捨てられたという



思いと戦わなければなりません(マタイ 27:46 ; 詩 22:1)。キリストは神の厳格な罪への罰を徹底的に引き受けられたのです。もちろん、そのおかげで私たちは完全に救われたのです(ヘブライ 2:15)。

ある人々はキリストが死を恐れられたと言う言葉を聞いて気分を悪くします。神の御子がどうしてそうなることができるのかと考えるのです。しかし、そう考えるのは十字架の恵みを半分以上に勘定しようとする悪巧みと言えます。むしろ私たちと全く同じ弱さを持たれたキリストは死と神から見捨てられること、そして地獄の恐怖を誰よりも徹底的に経験されなければならなかったのです(ヘブライ 4:15)。もちろん、そのような恐れに対する反応を見ると、彼の反応は私たち罪人とは全く違っています。ですから彼はその苦しみの中でも神の愛を信じる点では少しも揺るがされることがありませんでした。それを十字架の上で証明されたのです。

第4節 使徒信条解説：復活、昇天、そして神の右に座されたこと

復活がなければ今まで語られたことはすべて偽りとなってしまいます。彼が死なれたことで私たちの罪が取り除かれ、彼が復活されることで私たちの義がよみがえり、回復されたのです(ローマ 4:25)。彼の復活のおかげで彼の死が私たちの内で権威と力を現したと言えるのです(フィリピ 3:10 ; コリントー 15:17)。そこで彼の死と復活は硬貨の両面のようなものです。復活の第一の恵みは再生と義を受けることで、第二はキリストを手本として新しい命を歩むことができるようされ、第三に私たち自身の復活に対する確信を得ることができるようにされるのです(コリントー 15:12-26)。

しかしキリストが真の栄光を受けられて、御国を建てられたのは昇天されてからのことでした(ヨハネ 7:39 ; エフェソ 4:10)。彼の昇天で地上での肉体的な臨在は終わり(マタイ 26:11)。霊において私たちの内におられながら、さらに直接的な力で天地の主権者となろうとされたのです。そして彼は昇天されることではじめて地の果てまで私たちと一緒にいく

ださると語ってくださった約束を実現されたのです（マタイ 28:20）。

また神様はキリストの内で栄光を受けられ、キリストを通して統治されることを望まれたためにキリストを神の右側に迎えられたのです。彼の御心は今、キリストが天地に対する主権を受けて、裁きの日まで統治を継続されるということです（エフェソ 1:20-22；フィリピ 2:9；使徒 2:30-36；ヘブライ 1:8）。彼によって私たちの信仰が受ける恵みはたくさんあります。第一に天国の道を示します（ヨハネ 14:3；エフェソ 2:6）。第二は私たちには常に偉大な預言者と仲保者がおられます（ヘブライ 7:25；9:11,12；ローマ 8:34）。第三に、日ごとに霊的な宝を豊かに与えてくださるのです。

そのようにして敵をすべて屈服させ（コリントー 15:25；詩 110:11）、教会の建設を完成されるのです。「そこからこられて生きている者と死んだ者を裁かれます」。彼は昇天された時と同じく人の目に見える姿で栄光の内にすべての人に現れ、選ばれた者と遺棄された者を分けられるのです（マタイ 25:31-33）。既に死んだ者の身体もイエスの内にあった者は命の復活に、そうでない者は死の復活へとよみがえるのです（コリントー 15:51,52）。そして生き残った者も変化して主を迎えるのです（テサロニケー 4:16,17）。

第5節 使徒信条解説についての結論：ただ一つの泉

私たちには今、驚くべき慰めが残されています。やがて私たちを裁かれる方が、新しいイスラエルの十二部族を私たちが治めるように素晴らしい計画を立てられた方だからです（マタイ 19:28）。彼は私たちを裁きの場で罪にさだめるはずはないのです。私たちの贖い主が私たちが裁くその裁きの座におられるとうことは単純で平凡な保証ではありません（ヨハネ 5:22）。使徒信条はこのように私たちの救いが全的で、またそのすべての部分がひとつひとつみなキリストの内に含まれていると告白しているのです（使徒 4:12）。ですから最も小さな部分でも他の場所に求めてはいけません。キリストの内にだけ様々善きものが豊かに準備されているのです。それをただキリストというただ一つの泉から飲むことができると言っているのです。

結論

死の砂漠の中で見捨てられていた私たちにとってキリストはただ一つの命の泉です。使徒信条はその泉から私たちが受けることができる恵みを順序正しく整理して表現しています。私たちが礼拝を献げるたびに告白する使徒信条を黙想しながら唱えるなら私たちの信仰に大きな益となる偉大な慰めと希望を与えてくれるのです。